

佳作

おばあちゃんが日々与えてくれた温かさ

静岡県不二聖心女子学院高等学校二年 伊東 真理

今ではもうすっかりこの生活に慣れてしま
ったが、それでもお向いの家のおばあちゃんが
生きていた頃の記憶は鮮明に覚えている。

私は幼稚園入園と同時にこの町へ引っ越し
てきた。そして朝、母と共に幼稚園へ行く時毎
日必ず

「真理ちゃんおはよう。今日も元気にいってら
っしゃい。」

と声をかけてくれたのがこのおばあちゃんだ

「おはようございます、行ってきますーす。」
と言いつのが日課になっていた。

毎朝温かく学校へ送り出していただいたこ
とは今当時を振り返っても本当に有り難いこ
とだが、おばあちゃんにしていたいたことは
まだまだたくさんあるのだ。おいしい季節の果
物、作りたてのお餅、おばあちゃんが得意なお
赤飯などをよく

「真理ちゃん、おやつに食べなさい。」
と分けて下さったり、学校から帰っても偶然家
に誰もおらず寒い中、家の前で待っている私を
窓越しに見つけると

ったのである。どんなに朝が早くても、私が玄
関の扉を開けるとおばあちゃんは水まきや玄
関の掃除をして外に立っていた。そして笑顔で
私を送り出してくれたのだ。私が幼稚園に通っ
ていた時もそうだが、私が母なしでも平気にな
った小学生の時もおばあちゃんは毎朝私に挨拶
して下さり、幼稚園時代の記憶がほとんどな
い私にとっては、気がついた頃には、毎朝大き
な声で

「寒いでしょ、早く家上がりなさいな。」
と言って温かいコートを出して下さったりも
した。当時まだ幼かった私はおばあちゃんにそ
の日学校で楽しかったことなどをいっぱい喋
った記憶がある。また、その時の私のくだらな
い話でさえ、頷きながらずっと聞いて下さった
おばあちゃんのことも覚えているのだ。

私はなぜ叱られたのか全然覚えていないの
だが、私は小学生のある日、朝、母親に叱られ
て泣きながら学校に行った。そして母は朝早く
に大声を出して近所に迷惑をかけたのでは、と
思いおばあちゃんの所へ謝りに行った。すると

事情を知ったおばあちゃんが急に泣きだしてしまった、ということがあった。理由は「毎朝欠かさず真理ちゃんに挨拶しているのに、真理ちゃんが悲しい気持ちで登校した今日に限って朝、真理ちゃんに会えなかった」からだと言った。私はその話を学校から帰ってきて母から聞いたのだが、なんだか心がじーんとしてとても嬉しかったのを覚えている。確かによく考えればその日の朝はおばあちゃんにお会いしていないが、私はそんな事、全然気にしていなかった。でもそのことをおばあちゃんは泣く程気にしてくれた。つまり私のことを想って下さっ

たことが本当に嬉しくて、「自分を大切に思ってくれる人がいる」心地良さをその時感じたのだった。

おばあちゃんが亡くなられてもう一年が経つが、おばあちゃんと毎朝顔を合わせていた頃がとても懐かしい。少し大袈裟に聞こえるかもしれないが、おばあちゃんに見守られながら成長してきた私にとっては、おばあちゃんが生きておられた頃のことを本当にかけがえのないものだったのだ。今、私が朝、家を出ると近所のおばあちゃん達が、昔のおばあちゃんのように声をかけてくださる。だがやっぱりその中にお

ばあちゃんがない事が淋しくて、つい最近まで十数年くり返されてきた朝の「コマを過ぎせないのが悲しく」とても不思議な気持ちになるのである。でもそれと同時に、私がこんなに大きくなるまでの過程をずっと見守って下さったおばあちゃんに心から感謝したい。

毎朝して下さった「挨拶」。おばあちゃんが私の成長を見守りながらして下さいました日々の小さな心温まる出来事の積み重ねが、今の私の糧となって心の成長につながっていたのだと本当に強く思う。

